



## アジア旧石器協会の設立

小野 昭 (アジア旧石器協会執行委員)

アジア旧石器協会 Asian Palaeolithic Association (以下 APA と略す) が 2008 年 6 月 26 日に設立された。6 月 24 日から 30 日まで、ロシア、アルタイ山地のデニソワ洞窟遺跡前のキャンプ地で開催された A.P. オクラドニコフ生誕 100 周年記念国際シンポジウムの期間中に設立行事が行われた。2007 年 12 月の合意にもとづくものである (ニュースレター第 9 号 4 - 6 頁、旧石器研究第 4 号 182 - 185 頁参照)。

設立 4 カ国 (日本、韓国、中国、ロシア) の代表は各国から最大 10 名までと開催国のロシアから要請を受けていた。日本から 8 名 (音順敬称略: 出穂雅実、稲田孝司、小野 昭、小畑弘己、佐川正敏、佐藤宏之、島田和高、比田井民子)、韓国から 9 名、中国から 8 名、ロシアから 7 名の参加であった。アジア旧石器協会の設立行事とは直接関係ないが、ドイツ、ウクライナ、スペインから各 1 名、チェコから 2 名の参加があった。

26 日の朝、設立行事の内容と進行について事前の相談のため、各国から代表 2 名が出席して打ち合わせをおこなった。日本 (小畑弘己、小野 昭)、韓国 (李隆助、韓昌均)、中国 (高星、王幼平)、ロシア (A. P. デレヴィアンコ、M. シュンコフ) のメンバーである。設立行事の内容として 1) 会長選出、2) 副会長推薦、3) 次回開催地、4) シンポジウムのプロシーディングスの刊行が含まれることを確認した。また、成立行事の議長に李隆助氏を内定した。次回以降のシンポジウム開催国の順番は重要事項であり、2007 年 12 月の会議の際に、くじ引きで決めたらどうかという発言もあった。くじ引きによって次回が日本開催となるなどの危険を防ぐため、最初に問題を提起して次回開催国は中国、その次は韓国、最後に日本の順にするよう要請した。この場で決定する事項ではないので、案として次回は中国を予定していることを設立行事において提案することで内諾した。なお設立行事の際に日本は祝辞のステートメントを用意しているのを読み上げる旨を伝え了解を得た。

同日、シンポジウムの終了後、夕刻 6 時から設立行事が開催された。最初に会長選挙をおこない、APA 初代会長に A.P. デレヴィアンコ氏を選出した。次に 2007 年 12 月 6 日に 4 カ国の代表 (A. P. デレヴィアンコ、高星、リ・ヒョウンウ、小野 昭) が署名した合意文書のコピーが会場に配布され、新会長が 8 項目の合意内容について逐一読み上げ、補足説明を行い、質問と意見を求め、1 項目ごとに承認をとるかたちで進行した。最終的に今年の合意内容がすべて承認された。

つづいて、各国組織から推薦された APA 副会長候補 1 名の紹介と、同じく APA 執行委員 2 名が

紹介され承認を受けた。以下のとおりである（敬称略）。

副会長： 稲田孝司（日本）、李隆助（韓国）、高星（中国）、N. ドロズドフ（ロシア）

執行委員：小畑弘己・小野 昭（日本）、韓昌均・李憲宗（韓国）、王幼平・石金鳴（中国）、M. シュンコフ・G. メドヴェージェフ（ロシア）

紹介と承認の後、設立の祝辞が述べられた。日本からは稲田孝司氏、韓国は李隆助氏、中国は高星氏がそれぞれおこなった。なお、高星氏からは、次回のシンポジウムは中国の北京で2009年10月に開催を受け入れる用意がある旨、挨拶のなかで紹介があった。

ロシアは最後に新会長のデレヴィアンコ氏が挨拶をしてしめくくったが、この中で中国開催の次は韓国、その次は日本の予定であることが紹介された。大きな拍手の中、設立行事は終了した。

設立行事の後、食堂の前で全員の集合写真の撮影があり、夕食に移った。夕食時には、各国、各人から様々な祝辞や挨拶がおそくまで続き、長い一日が終わった。

日本旧石器学会が2003年に発足してから5年、最初に国際組織設立の必要の話が高星氏から松藤和人氏を通じてわれわれに伝えられてちょうど6年、東アジア地域を中心とした国際組織を立ち上げることのむずかしさを経験しながらようやく設立に至った。いま振り返ると、日本旧石器学会設立時に、「東アジア旧石器学会の組織・運営等について」のガイドラインを策定しておいたことが実質的に大きな支えになった。4カ国の合意はこの内容に沿って議論され作成されたからである。今回の設立行事に関する記事と資料はノボシビルスクで刊行している国際誌 *Archeology Ethnology & Anthropology of Eurasia* に APA のコーナーを設け一括掲載される予定である。

合意にあるように、国際シンポジウムは毎年開催、会長、副会長、執行委員の交代は2年毎である。予定ではしたがって2011年が日本開催年である。当分は合意内容をもとにしたシンポジウムベースの緩い運営形態が続くものと思われる。小なりとはいえ日本の学会がその構成の一翼を担って国際組織を立ち上げた経験は、日本の考古学の歴史にもまだないことであろう。むしろ何年も経過した後に振り返って、その意義が充分認識できるようになるのかもしれない。いま確実に言えることは、ここに至るには、日本旧石器学会の渉外委員会、役員会、会員のみなさまの支えがあって初めて可能であったということである。

生まれたばかりのこの組織を日本旧石器学会からの身近な情報発信の場として、また多面的な交流の場として位置付け、若い研究者とともに育ってほしいと願う次第である。

A.P. オクラドニコフ生誕 100 周年記念  
国際シンポジウム・点描

アジア旧石器協会（APA）の設立行事が行われた、A.P. オクラドニコフ生誕 100 周年記念シンポジウムは、6月24日から30日にかけて開催された。テーマは、“The current issues of Paleolithic studies in Asia and contiguous regions”。私達がデニソワ洞穴遺跡に近い常設考古学キャンプに到着したのは、24日夕

刻であるが、ノボシビルスクにある The Institute of Archaeology and Ethnography SB RAS から車に乗り込んで約9時間強の行程を要した。アルタイ山地の麓から、なだらかで広大な、印象深い山並みを縫うように進み、幾つかの村を過ぎる。アヌイ川に到り、左手の山腹に開いたデニソワ洞穴と資料整理棟をみてすぐ、急峻な山間にあるちょっとした丘の連なりの上に、訪問者用の宿泊棟や食堂が建ち並ぶ。食堂脇の大穴は何かと思えば、聞くとアヌイ I 遺跡の発掘トレンチであった。

シンポジウムは、25日から27日の午前中にかけて



写真1 国際シンポジウム開会行事風景

2日半、エクスカージョンは資料見学とあわせて27日の午後から30日にかけて3日半行われた。シンポジウムは、概ね各国グループ毎に研究発表が行われ、グループ・リーダーの司会によるディスカッションが続く。一日の締めくくりは、A.P. デレヴィアンコ氏の司会によるコロキウムで、テーマは「北・東・中央アジアにおける石刃を基調とする石器製作技術の起源」(26日)、「北・東・中央アジアにおけるホモ・サピエンス・サピエンスの起源」(27日)。今後、APAとして日本での国際シンポジウムが開催されるので付け加えると、シンポジウムの使用言語は英語とロシア語で、必要に応じてロシア語／英語間で通訳されていた。

シンポジウムの初日となった25日は、A.P. デレヴィアンコ氏の挨拶と趣旨説明に始まる総会で、各国代表者による記念研究発表(発表順：高星、小野昭、李隆助、A.P. デレヴィアンコ)が行われたのに続いて、ロシアグループ(2件)と中国グループ(6件)による研究発表があった。26日には、ロシア(1件)、ウクライナ(1件)、チェコ(1件)の研究者による発表に続いて、日本グループ(4件)による研究発表と小野昭会員の司会によるディスカッションが行われた。同日にあったAPA設立行事は、小野昭会員が報告している通りである。27日は、午前中に韓国グループによる研究発表(4件)とディスカッションが行われた。午後から日本グループは、現在も発掘調査が継続されているデニソワ洞穴遺跡のエクスカージョンに参加し、印象的な既発掘区セクションや今の発掘状況を

視察することができた。この日は、私達のエクスカージョンの後、T. マリッチ氏(ドイツ)により、オクラドニコフ洞穴遺跡とテシク・タシュ洞穴遺跡のネアンデルタール化石 mtDNA 分析の成果が報告され、従来よりも広いネアンデルタールのアジアへの進出が示唆されるとともに、現生人類との種レベルでの違いが強調された。28日には、開地遺跡であるウスチ・カラコル遺跡、80万年前と推定されているカラマ遺跡他のエクスカージョンに参加した。29日は、カラ・ボム遺跡からチュメチン遺跡へのエクスカージョンの後、運悪く湿地に車が激しくはまり、5時間程足止めを食うアクシデントに出会った。しかし、翌日にアルタイを発たなくてはならない私達には、その日のうちに宿舎に帰り着けただけでも僥倖であった。

もちろん、日本でもアジア各国との共同研究は、盛んに行われている。しかし一方で、アジアでも稀にみる旧石器研究者人口と緻密な研究成果の蓄積を考えると、総体としての海外への露出度の低さは否めない。筆者も間違いなく出不精の部類に入るのだが、まずは実際に顔を合わせて挨拶することから研究交流をはじめてもよい。アジアの研究状況を少し垣間みるだけでも、身の回りの資料が違う文脈の中でみえるかもしれない。APAの今後が、多くの会員にとって身近な国際交流の基点となるよう尽力させて頂くとともに、皆様のご協力を仰ぎたい。最後に、今回のAPA第1回国際シンポジウムは、誰彼となく参加者を歓待し和ませる暖かみを感じさせるものであった。ロシア側主催者各位には、敬意を表したい。(島田和高)



写真2 エクスカージョン(デニソワ洞窟遺跡)

## 第6回日本旧石器学会報告

2008年6月21日・22日に東京都首都大学東京講堂小ホールにおいて、第6回日本旧石器学会が開催され、総会、記念講演、一般研究発表、シンポジウム「日本列島の旧石器時代遺跡—その分布・年代・環境—」ならびにポスターセッションが行われた。

1日目は、午前中に総会が行われ、選挙の結果に基づいて第3期の役員会が発足し、白石浩之氏を会長に選出したこと、事務局についても愛知学院大学白石研究室（白石浩之）から明治大学博物館（島田和高）へ変更になったことが報告された。続いて、各委員会の2007年度活動報告ならびに2008年度活動計画報告などが行われた。

午後からは、ドイツから2人の演者を迎えて記念講演が行われた（通訳：東京大学総合研究博物館門脇誠二）。ニコラス・コナード氏（チュービンゲン大学）はシュヴァーベン高地のジュラ山系における中期旧石器時代後半から上部旧石器時代前半の調査研究を紹介しながら、西南ドイツでは中期旧石器時代と後期旧石器時代の間に断絶があり、大規模な気候変動に関連した人類の交代によるものであるという見解を述べた。オーラフ・イェリス氏（ローマ・ゲルマン中央博物館）はウラントリウム年代に基づいた中国フールー洞窟生成物とグリーンランド氷床コアの酸素同位体変動パターンが極めてよく類似し、これらの成果を用いて2～5万年前の精度の高い放射性炭素更正年代が構築でき、酸素同位体ステージ3の年代観の確立に大きな影響を与えること、今後海洋リザーバー効果や火山イベントなどとの関連について研究を深める必要があることなどが述べられた。引き続いて、一般研究発表が行われ、4本の発表があった。発掘調査報告2、国内を対象とする研究2である。

2日目はシンポジウムで、午前中に基調報告、午後からパネルディスカッションが行われた。今回のシンポジウムは、現在集成中のデータベースに関連して企

画され、第四紀学会と共催で行われたことから、日本列島の旧石器時代遺跡分布および環境に関する問題を中心に発表と議論が行なわれた。基調報告では、遺跡分布と資源、領域などをキィ・ワードとして、日本列島全体（大竹憲昭）、北海道白滝産黒曜石（直江康雄）、南関東（伊藤健）、南九州東南部（芝康次郎）の様相が語られ、環境関連として、年代と環境（工藤雄一郎）、野尻湖の資料による気候変動復元（公文富士夫ほか）、大型哺乳類を中心とする動物相の変遷と絶滅（近藤洋一）について発表があった。各基調報告に対してはあらかじめ用意されたコメンテーター各1名ずつによってコメントがなされた。

討論会は2つのテーマに絞って議論された（司会：堤隆・小野昭）。第1は遺跡分布に関するもので、データベースにおける1遺跡の意味、日本列島における遺跡分布の特徴、遺跡分布における粗密の背景（地理的位置、原産地、人口、見かけの分布など）、後期旧石器時代の開始と終末の年代などが議論された。また、韓国における遺跡発見例の増加と遺跡分布状況の関連について朝鮮大学校李起吉氏から韓国西南部の状況が説明された。第2は環境と動物相に関するもので、気候変動と動物化石・動植物相の変化の関連性、ナウマンゾウの絶滅と気候変動・人類活動の関係、気候変動と遺跡の増減の関連、ヨーロッパと東北アジアにおける旧石器人寒冷地適応の相違の背景などについて議論した。また、記念講演を行ったコナード、イェリス両氏から、中部ヨーロッパにおけるLGM前後の気候変動と遺跡分布の様相について両者の関係が極めて明瞭であることが説明された。



写真3 討論会の様子

2日間にわたってポスターセッションが行われた。今回は11本の多くの参加があり、会場では活発な議論が行われた。新たな議論の場として定着してきた感があり、今後の一層の発展が期待される。

## 2007年度委員会報告

総務委員会 以下の5項目が主要な活動である。

1. 総会・役員会開催にあたっての資料作成、会場準備、連絡調整、委員間の調整、2. 会誌(第3号)、ニュースレター(第7～9号)の会員への発送、3. 日本考古学協会総会時などにおけるシンポジウム予稿集の頒布、4. 新入会員の入会・会員住所変更などに関する諸事務、5. 選挙管理委員会の設置、6. 地域研究会との共同開催の準備作業。4については、2007年度新入会員は9名で、現在会員数は226名である。5については、地域研究会7団体に対して、研究発表、シンポジウム等の共同開催についてアンケートを実施した結果を2007年度総会で報告し、これを受けて2009年度日本旧石器学会を九州旧石器文化研究会と共催で鹿児島県において開催する方向で協議を始めた。

会誌委員会 会誌第4号の編集を行った。4名の編集委員が分担して編集作業を行い、諏訪間が最終的な編集、印刷所との交渉などを行った。第4号は第5回シンポジウム「旧石器時代の生活を考える」の特集号とし、発表者全員の発表成果を掲載した。一般投稿原稿の申し込みは6本あったが、最終的には4本受理した。シンポジウム特集は論文、総説、研究ノート合わせて6本で、このほかに、巻頭言1、総説1、原著論文1、研究ノート1、書評1、シンポジウム報告1、ポスターセッション報告7などで、本文は190頁、表紙、目次などを加えて合計200頁となった。

渉外委員会 旧石器学会設立当初から懸案であったアジアにおける旧石器時代研究の国際組織立ち上げの準備についてこれまで進捗がなかったが、この問題について大きな進展があった。2007年12月3日～7日にロシア・ノボシビルスクで「日本・韓国・中国・

ロシア4カ国で設立する旧石器研究組織の組織問題会議」を開催し、日本からは渉外委員長(小野)が参加して、(仮称)アジア旧石器協会(Asian Palaeolithic Association、略称APA)設立に向けて合意に達した(詳細はニュースレター第9号を参照)。アジア旧石器協会設立総会は、2008年6月24日～30日にロシアのアルタイ山地で開催された「オクラドニコフ生誕100周年記念国際シンポジウム」の会期中に行なわれた。日本旧石器学会からの情報発信は例年通り行っており、『旧石器研究』第3号、ニュースレター第7、8、9号を、韓国、中国、ロシアの学会事務局宛に送付した。

ニュースレター委員会 2007年度は第8号を2007年10月、第9号を2008年3月に発行した。第8号は、2007年6月に東京都東京大学本郷キャンパス法文2号館において開催した第5回日本旧石器学会の報告ならびに2006年度委員会活動報告・2007年度委員会活動計画などの定例報告を掲載した。特別寄稿「最近のシベリア旧石器研究の動向」を木浦大学校李憲宗氏(訳は忠北大学校金正培氏)にお願いし、研究組織と主要な研究成果の概要を中心に紹介がなされた。このほか、第3期の役員選挙のお知らせ(告示)などを掲載した。第9号は、旧石器時代研究と密接な研究分野の最新研究成果や課題などの紹介を目的とした新たな企画として、特別寄稿「蛍光X線分析法の最近の話題について」を沼津工業高等専門学校望月明彦氏、沼津市文化財センター池谷信之氏に話題提供をお願いした。沼津工業高等専門学校望月研究室での分析法を中心として、この研究法の特徴や課題、今後の展望などについて紹介していただいた。また、国際学会組織立ち上げの進捗状況について小野昭渉外委員長に執筆を依頼した。国際学会組織立ち上げに関連する動向は、昨年12月にロシア・ノボシビルスクで「日本・韓国・中国・ロシア4カ国で設立する旧石器研究組織の組織問題会議」が開催されたことによって大きく状況が進展を見せ、組織立ち上げの準備が整ったことからその概要報告をお願いしたものである。このほか、役員(第3期)選挙結果のお知らせ、2008年度(第6回)日本旧石器学会開催のお知らせなどを掲載した。

**研究企画委員会** 2007年6月24日開催のシンポジウム「旧石器時代の生活を考える」の企画を立案し、6月23日・24日に行った一般研究発表、ポスターセッションを含めた開催準備（発表依頼、シンポジウム予行集の編集・刊行）および当日の運営を行った。

**データベース委員会** 日本旧石器時代（先土器・岩宿）遺跡データベース作成作業を継続している。各地から寄せられた集成データは入力上不統一な箇所が生じており、このままでは一つのデータベースに集計できないので、集成データの点検に着手するとともに、修正の方法、データを全体的につなげる方法などを検討した。昨年刊行の会誌で中間集計を報告したが、その後一部の県の集計漏れやその後の提出分を含めると、2008年5月20日現在で、10,431遺跡（37都道府県）である。

## 2008年度活動計画

**総務委員会** 今後予想されるアジア旧石器協会シンポジウム開催に向けて渉外委員会などと連携しながら協議を進める。また、2009年度の九州旧石器文化研究会との共同開催について、体制、九州旧石器文化研究会との役割分担などについて検討を行う予定である。そのほかとして、引き続き新入会員の拡大に努めるとともに、会員の連絡体制の整備（電子メールの活用など）、会費未納入会員への対応などについて進めて行く予定である。

**会誌委員会** 第5号の編集作業を行う。第5号は、巻頭言1、原著論文8以内、研究ノート1、資料報告1、書評1、2008年活動報告などで構成する予定であり、合計200頁程度の分量を目指したい。論文のうち、少なくとも半分以上は第6回シンポジウム発表者による投稿を予定している。これまで、シンポジウム関係者原稿や書評は会誌委員会内の査読にとどめていたが、今後は外部査読とする。本誌が査読誌として高いレベルの雑誌であり続けるためにより公正で適切な査読制度を維持して行く必要があり、会員諸氏のご協力をお

願いたい。

**渉外委員会** 本年6月のアジア旧石器学会設立時に第2回以降の開催地についても議論され、中国、韓国、日本の順で開催が決定された（詳細はニュースレター本号参照）。今後、この日程に合わせて諸準備（テーマ、開催場所、予算、エクスカージョンなど）を具体的に進めることとなり、本委員会で具体案を検討する。その後、役員会に報告して検討を行い、準備を進める段取としたい。また、引き続き、会誌（機関紙）、ニュースレターの送付を、韓国、中国、ロシア学会事務局宛に送付する。

**ニュースレター委員会** 2008年9月末にニュースレター第10号、2009年3月末に第11号を刊行予定である。第10号は第6回日本旧石器学会（総会、研究発表、シンポジウム、ポスターセッション）報告、2007年度委員会活動報告、2008年度委員会活動計画を掲載予定であり、アジア旧石器協会の立ち上げについても報告を依頼する。第11号の内容については未定である。年2回の発行のうち、年度前半の号は大会の概要報告と各委員会の活動報告、活動計画の概要報告を、年度後半の号は東アジアにおける最近の調査・研究の紹介、関連学会の研究動向を主眼として紙面づくりを行っており、ほぼスタイルが定着してきた状況であるが、今後はこのスタイルを維持しながら、機動的な役割が発揮できるよう3回以上（将来体制が充実すれば年4回程度を視野に入れるとよい）にすることを検討していきたい（次年度以降）。

**研究企画委員会** 第7回旧石器学会のシンポジウム、記念講演、一般研究発表、ポスターセッションの準備を九州旧石器文化研究会と共同で行う。

**データベース委員会** 残りのデータ集成分を完了し、収集データの点検と修正（手書きデータの入力、1遺跡1シートのデータ修正など）を行う。その後に、データベース構築アプリケーションを購入してデータの連結を行い、データベースを完成させる。データベース完成後は配布と公開を行う予定である。また、データベースを収録した刊行物の体裁、刊行方法などについても検討したい。

日本旧石器学会 2007年度決算内訳

単位：円

収 入				
費 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
1 会費収入				
会費収入	1,360,000	1,275,000	-85,000	2007年度会費198名、2006年度会費37名、2004-2005年度会費7名、2008年度10名、2009年度3名
2 雑収入				
会誌頒布代金	460,000	362,800	-97,200	会誌3号51部、バックナンバー55部
シンポジウム予稿集頒布代金	331,500	266,400	-65,100	予稿集5号170部、バックナンバー30部
雑収入		1,114	1,114	
前期繰越収支差額	962,971	962,971		
小計①	3,114,471	2,868,285		
支 出				
費 目	予算総額	決算額	増 減	摘 要
会議費・会場設営費	55,000	88,690	33,690	役員会等会議費、総会会場器材使用料、他
旅費交通費	80,000	110,660	30,660	総会シンポジウム発表者交通費補助、国際会議折衝渡航費の補助、他
通信運搬費	229,500	153,490	-76,010	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他
消耗品費	49,500	26,993	-22,507	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,388,500	1,340,000	-48,500	会誌、ニュースレター、他
諸謝金	125,000	20,000	-105,000	講演料他
雑費	14,000	8,215	-5,785	雑費（銀行手数料等）
予備費	1,172,971	0	-1,172,971	予備費、他
小計②	3,114,471	1,748,048	-1,366,423	
次期繰越金小計①-小計②	0	1,120,237		

日本旧石器学会 2008年度予算内訳

単位：円

収 入				
費 目	予算額	前年度予算額	増 減	摘 要
1 会費収入				
会費収入	1,330,000	1,360,000	-30,000	(会員216名) × 5,000円、(週及分50名) × 5,000円
2 その他の収入				
会誌頒布代金	496,000	460,000	36,000	89部 * 4000円 = 356,000円、バックナンバー140,000円
シンポジウム予稿集頒布代金	268,000	331,500	-63,500	会員頒布100部 * 1,200円 = 120,000円、一般頒布72部 * 1,500円 = 108,000円、バックナンバー40,000円
前期繰越収支差額	1,120,237	962,971	157,266	
小計①	3,214,237	3,114,471	99,766	
支 出				
費 目	予算額	前年度予算額	増 減	摘 要
会議費・会場設営費	80,000	55,000	25,000	役員会会議費、総会会場設営費、他
旅費交通費	125,000	80,000	45,000	役員会議旅費補助、国際会議旅費補助、発表者旅費補助、他
通信運搬費	204,500	229,500	-25,000	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他
消耗品費	84,500	49,500	35,000	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,456,000	1,388,500	67,500	会誌、ニュースレター、他
諸謝金	85,000	125,000	-40,000	臨時事務補助謝金、講演発表謝金、他
雑費	14,000	14,000	0	雑費（銀行振込手数料他）
予備費	1,165,237	1,172,971	-7,734	予備費、他
小計②	3,214,237	3,114,471	99,766	
小計①-小計②	0	0	0	

2008・2009年度役員会

役員選挙の結果に基づいて、2008年6月の総会の承認を経て第3期役員による役員会が発足し

ました。役員会および各委員会の構成は以下の通りです。

会 長 白石浩之

副会長 比田井民子

幹 事 伊藤 健、出穂雅実、稲田孝司、小畑弘己、

加藤勝仁、亀田直美、木崎康弘、小菅将夫、佐川正敏、佐藤良二、島田和高、白石浩之、鈴木次郎、鈴木美保、砂田佳弘、西井幸雄、野口淳、比田井民子、藤野次史、光石鳴巳、宮田栄治、山原敏朗

総務委員会：島田和高\*（兼、事務局）、鈴木美保（兼）、西井幸雄

会誌委員会：木崎康弘\*、亀田直美、出穂雅実（兼）、宮田栄治（兼）、（委員：門脇誠二、仲田大人）

ニュースレター委員会：藤野次史\*、加藤勝仁、山原敏朗、（委員：谷和隆）

渉外委員会：小畑弘己\*、佐川正敏、鈴木美保（兼）、出穂雅実（兼）

研究企画委員会：伊藤 健\*、佐藤良二、野口 淳、宮田栄治（兼）

データベース委員会：稲田孝司\*、小菅将夫、砂田佳弘、比田井民子（兼）、光石鳴巳、（委員：大竹憲昭、藤波啓容）

会計委員会：鈴木次郎\*、西井幸雄（兼）

入会資格審査委員会：佐川正敏\*（兼）、島田和高（兼）、（委員：諏訪間 順）

会計監査委員会：荒井幹夫、御堂島 正

顧問：町田 洋、小林達雄、馬場悠男

\*は委員長、（兼）は兼務を示す。

（委員）の方は、各委員会からの要望を受けて役員会で審議した上で会長が委嘱した役員以外の会員である。

## おしらせ

### 会則の部分改正

このたびの役員改選に伴い、事務局が交代したため会則付則2を改正した。以下に全文を示す。

（改正前）本会の事務所は、愛知県日進市岩崎町阿良池12、愛知学院大学文学部白石浩之研究室に置く。

（改正後）本会の事務所は、東京都千代田区神田

駿河台1-1 アカデミーコモン地階、明治大学博物館（島田和高）に置く。

### 会費納入のお願い

日頃より日本旧石器学会の運営につきましてご理解、御協力をいただき、ありがとうございます。日本旧石器学会では会費は前納を原則として運営をさせていただいております。これに関連し、ここ数年に亘る一部の未納会費は、累積赤字として会の運営上の負担となってきております。そのため、本学会では会計年度の決算期日にあたる3月31日の時点から遡る3年間にわたり、会費未納の会員の方には、ニュースレター、会誌の配布を停止させていただきます。なお、その後、本会の請求に応じて、未納分会費の納付手続きがなされた時点で配布の停止は解除されます。会費を長期に未納されている方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。

なお、2008年度会費の納入をお願い致します。年会費5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。

### 住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願い致します。事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター  
第10号

2008年10月1日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

加藤勝仁・谷和隆・藤野次史・山原敏朗

発行：日本旧石器学会

事務局：明治大学博物館 島田和高

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

アカデミーコモン地階 電話：03-3296-4431

E-mail ma96018@mics.meiji.ac.jp